

2018 年度学生企画展報告

物録 (モノローグ) — 資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ

A Report on the Special Exhibition
by Students at Kanazawa University Museum in 2018, “MONOROGU
(Monologue)”:

SHIRYO TACHI NO HARANBANJYO NA “MONO”GATARI
(A Story-telling of the Collection Materials of the Kanazawa University Museum)

松下梓(1)、岡田優太(1)、櫻井宇佳(1)、藤本夏実(1)、笠原健司(2)、菅原裕文(3)、河合望(4)

Azusa MATSUSHITA, Yuta OKADA, Hiroka SAKURAI, Natsumi FUJIMOTO,
Takeshi KASAHARA, Hirofumi SUGAWARA, Nozomu KAWAI

(1) 金沢大学大学院 人間社会環境研究科 博士前期課程
Master's Course, Human and Socio-Environmental Studies, Kanazawa University

(2) 金沢大学 情報部情報企画課
Information Planning Division, Information Department, Kanazawa University

(3) 金沢大学 人間社会研究域 歴史言語文化学系
Faculty of Letters, Institute of Human and Socio-Science, Kanazawa University

(4) 金沢大学 新学術創成研究機構 金沢大学資料館
Institute for the Frontier Science and Kanazawa University Museum, Kanazawa University

Abstract

In this article, we look back on the student's exhibition “Monologue: The Turbulent Story of Materials,” at Kanazawa University (16/11/2018-19/01/2019) and evaluated by the students who actually participated in this exhibition program. Sugawara and Kawai introduce this article, presenting the background of the special exhibition by the students of Kanazawa University as a part of the class “Museum Training” and the overview of the class schedule. Matsushita discusses the ideas of this exhibition in Chapter 2. In Chapter 3, Sakurai shows the selection and research of the materials, and in Chapter 4, Fujimoto focuses on the display of the exhibition. In Chapter 5, Okada looks back on educational activities, such as gallery talks and workshops on the Nihon Makyō. Finally, Kasahara, who cooperated as a curator of Kanazawa University Museum, considers the significance of a special exhibition conducted by students in the university museum.

1. はじめに

2014年度以来、金沢大学では博物館実習の一環として学生による企画展を開催してきた。周知のごとく、文科省による博物館実習ガイドライン（2009年度版）では2単位相当の学内実習、1単位相当の館園実習が推奨されている。金沢大学資料館（以後資料館と呼ぶ）は2016年4月に北陸の高等教育機関では初めて博物館相当施設に指定されているが、資料館において開催された学生企画展は館園実習ではなく、学内実習の一部に当たる。

資料館は1989年の開館より学芸員養成課程への協力と連携を行ってきたが¹、学生による企画展が開催されたのは2014年の「植物図「館」」が初めてである²。以降、翌2015年度には「破かれた恋愛小説～『寒潮』に翻弄された四高生～」³、2016年度には本学が所蔵する物理実験機器を紹介した「ハカリモノ - 文系学生が紹介する科学実験機器 -」、2017年度には北溟寮の閉鎖を承けて、100年あまりに及ぶ本学学生寮の歴史・伝統を紹介した「バンカラ寮生類」と続いた。

本稿で論じる2018年度の学生企画展は、以上に紹介した展覧会に続く、5度目の学生企画展「物録 モノログ - 資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」である。この企画展は本学資料館が所蔵する資料がどのような経緯を経て資料館に所蔵されるに至ったのか、収蔵資料の「数奇な」来歴にスポットライトを当てた展覧会である。この企画展でクローズアップされた資料の来歴探求は学芸員がバックヤードで行う、地道ながらも極めて重要な職務の一つであるが、これまでこうした学芸員の職務に着目した展覧会は開催されなかった。我々が展覧会に足を運んだとしても、資料の来歴は既知の情報として受け取りがちであることは否めない。それゆえ学芸員を目指す受講生にとっても企画展「物録」は学芸員の重要な職務の一端を実際に経験し、再認識する、この上ない機会になったと思われる。後段でも述べられるが、この学生企画展に伴う教育普及活動はNHK金沢放送局のニュースでも取り上げられた。このことは本学の試みが地元メディアにも注目された事実として紙面を割いておきたい。

ここでは2018年度の博物館実習全体を振り返りつつ本稿の構成に言及する。2018年度7月まで企画展のアイデアに関する討議と学芸員資格取得に必要な知識・技術の習得と訓練に時間を費やした。実習開始直後の4月に資料館のバックヤードで収蔵資料を実見し、本学資料館の学芸員から企画展の概要について説明を受けた。以後、実習生は役割分掌に基づき、それぞれの立場から本企画展のアイデアを討議することに授業時間を費やした。この点に関しては第2章で松下が論じる。7月には学芸員資格には不可欠な資料の取り扱い、すなわち考古資料や美術資料の取り扱いや展示方法など、資料館の収蔵資料の実物に触れつつ実習を行った。

8～9月と夏季休暇を挟みはしたが、その間にも実習生は展示資料の選定と調査、展示室の構成やキャプション・解説パネルの作成を行い、企画展の開催後はミュージアム・ツアーやワークショップなど教育普及活動を行った。6ヶ月という短期間、さらに大半が卒論を抱える4年生であるにもかかわらず、一通りの学芸員業務をこなした実習生には感嘆するのみである。第3章では櫻井が展示資料の選定と調査について、第4章では藤本が展示室の構成と設営について、それぞれ執筆を担当する。第5章においては岡田が日本魔鏡に関するワークショップを中心に、ギャラリートークといった教育普及活動を振り返る。学生たちが具体的にどのような運営方法を採用したのかについては、次章以降に記される受講生の「生の声」に委ねることとする。本稿末尾で資料館学芸員として授業に協力した笠原が結論も兼ねて全体を振り返り、大学付属の資料館で学生による企画展を行う意義について考察する。

加えて、教員として実習に関わる際に留意した点を三点だけ記したい。第一に金沢大学の博物館実習では学生の能動的な活動を確保するためアクティブ・ラーニング方式を採用してきた。2018年度の実習生は18名であり、これを展示・資料・キャプション・デザインの4班に編成した。毎週の授業では「前週までの振り返り（15分）→議論・作業（120分）→議論・作業の報告（15分）」というサイクルを繰り返し、学生が主体的に学習できるよう、教員は各班のアドバイザーや全体のオブザーバーの立場に徹した。この方式に促されて学生の問題解決能力・調査能力・ディスカッション能力はもとより、コミュニケーション能力までもが飛躍的に向上したと思われる。

二点目は、班体制と役割分掌を明確化することに意を注いだ。実習生は先述のように18人4班編成である。各人が担当する業務の進捗は各班リーダーにより把握され、各班の議論・作業の進捗は全体リーダーによりマネジメントされる。企画展オープニングまでのタイト・スケジュールが学生の焦りに拍車をかけたことも否めないが、展示までの準備期間を通じて学生の主体性と責任感において著しい成長が見られたことは特筆すべきであろう。学芸員の業務は多岐にわたるため、学生同士、あるいは班同士の協力・連携体制が重要になる局面がある。次章以降指摘されるように2019年度にはそうした局面が多々あった。学生自身は自らの役割分掌を超えて業務をせざるをえなかったと感じる向きもあるだろうが、教員としては学生が企画展を完成させるために柔軟に連携しつつ事態に対応したと積極的に評価したい。

三点目はテクニカルな点である。金沢大学の博物館実習では、これまでもソーシャル・ネットワークやクラウド・サービスを活用してきた。何ゆえ俄かづくりの組織が「夏季休業を挟んで」議論・作業を進められたのかを省みると、学生が自主的に会議を行っていたことに加え、フェイスブックやラインといったソーシャル・ネットワーキングが功を奏しているのは2018年度の実績からも明らかである。フェイスブックでは学生・学芸員・教員により他者が閲覧できないクローズド・コミュニティを形成し、そこで自由で活発な議論を行うとともに、議論や作業の結果をアップロードして実習生全員で共有した。また急を要する連絡などではラインが、班内外での横の連携を比較的円滑にしたのに一役買った。こうしたソーシャル・ネットワークの導入は当初きこなかったが、実習を終えるまでにほとんどの学生が熟練を見せた。ただし、2018年度は複数のクラウド・サービスを併用したために混乱が生じたが、この点に関してはクラウド・サービスの一元化、あるいは複数のサービスを業務ごとに使い分ける等、改善が必要になろう。

金沢大学では博物館実習を受講するには原則として実習以外の博物館関係科目を全て履修していることが条件となっている。そのため、必然的に実習生の大半が4年生になる。実習生は就職活動や教育実習、そして卒業論文という学生生活の大きな山場に直面する。また博物館実習を終えたとしても、学芸員として採用される学生は稀である。こうした超人的な忙しさと採用条件の厳しさにもかかわらず、博物館実習を行う意義とは何か。第一には、そして直近には学生の学習効果や人格的成長に留まらず、学生生活を通じて何事かを成し遂げたという達成感にある。第二には、実習を通じて博物館学芸員の業務を一通り経験することにより「ミュージアム・リテラシー」とでも呼ぶべきものを身につけた人材を世に送り出すことであろう。博物館は一般に資料の収集・保存・研究の場と捉われがちである。しかし、ミュージアム・リテラシーを身につけた人材を輩出することは、将来、博物館が豊かな生涯教育の場として市民生活に根付いていく一助となるのではないかと考えている。

（菅原・河合）

2. 学生企画展の流れ

本章では学生企画展「物録（モノログ）—資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」のテーマ選択と準備作業、企画展開催後の成果について述べる。その中でも特に、企画展のテーマとコンセプトの決定に至る経緯と、学生が班ごとに行った活動日程を詳述し、展示資料の調査、展示室の構成と展示作業、関連企画等の実施に関しては、次章以降に譲る。

(1) 班設定

博物館実習の初回講義である2018年4月12日に、学生企画展に向けた班割りとは役割の振り分けが行われた。教員の指導のもと、展示計画・展示資料の決定・全体の調整を行う展示班、展示資料の調査・展示資料の選択を行う資料班、パネル・キャプションの文章作成を行うキャプション班、ポスター・パネル・キャプションなど掲示物のデザインを行うデザイン班の4つの班に分けられた。各班より1名ずつ班リーダーを選出し、全体より2名ずつ教員・資料館職員との連絡を、実習生の代表として行う全体リーダー兼連絡係を選出した。

準備を進めていく中でキャプションの文章校正、ミュージアム・ツアー、ワークショップといったグループ単位での活動が必要な作業が生じた。そのため、既にいずれかの班員となっている者から5名の校正係、1名のプレスリリース係、3名の教育普及活動係を追加して設けた。(表1) テーマ決定までは班単位ではなく、授業全体での話し合いであったため、各班での活動開始は、資料班による資料調査が開始された5月以降となった。

(2) コンセプトとテーマの決定

学生企画展のコンセプトとテーマの決定は、例年では全体での話し合いから入っていたが、今年はコンペティション形式でテーマを決定する試みがなされた。第3回授業で開催された各実習生によるプレゼンテーション発表では、学生企画展の原則である資料館収蔵資料を使った展示を念頭に置きながら、個人単位で学生企画展にてどのような展示がしたいかをまとめて発表した。発表では、テーマやタイトルの他、資料館の公開しているヴァーチャルミュージアムに掲載されている収蔵資料から、展示を想定して、30点前後の資料を選び展示リストを作成した。

この中から受講者全員の投票によって投票によって展示企画を選び、そこから整えていくという計画であったが、それぞれの発表で使用する資料が似通っている等の理由から折衷案を検討することとなった。全員の発表の中から特に人気のトピックを組み合わせた結果、人文科学系の資料を使った展示と、自然科学系の資料を使った展示の2つの展示候補のグループが出来上がった。

この2グループによるディベートが重ねられたが、方向性が定まらず、最終的にどちらのグループとも異なる方向の提案に多数が賛同することによって話し合いが収束した。これが5月24日に投票によって決定した仮テーマである。「廃棄される予定だったが資料として救出された資料館資料」または「廃棄される予定だった資料を収集した資料館」というものである。これは、資料館の所蔵する資料の多数が、廃棄を逃れてキャンパス内から移管されたものであることに由来する。また、この2019年に資料館が設立30周年を迎えるため、金沢大学の歴史的な転換となるキャンパス移転、資料館設立に関わる要素を含めるということを意識した。

これをもとに、実習生全体で意見を出し合いタイトル決定とコンセプト決定を並行して行った。その際、資料館からアドバイスを頂き、仮テーマを「資料館資料の来歴」へと変更した。この企画

展テーマは、初めは救うことに重きを置いたタイトルやコンセプトであった。しかし、資料館職員からアドバイスがあり資料館の収蔵品の多くは、資料館から声を掛けただけではなく、他の教職員からの提案によって移管するかどうかを検討する、といった過程があることを踏まえてコンセプトを転向させた。タイトルについては、はじめ、個人単位で意見を出し合い、そこから投票によって決定する計画であったが、妥当なタイトルが思いつかず、夏休み直前までタイトル決定のための話し合いが続いた。最終的に「収蔵資料のもつ背景ストーリーに着目する」ことを念頭に置き、独白を意味する「モノローグ Monologue」と「物の記録」をかけて「物録—モノローグ」というタイトルで決定された。後に、このタイトルだけでは展示内容が伝わりにくいという意見が出たため、より詳細に展示内容を説明するため、副題を添えた「物録（モノローグ）—資料たちの波瀾万丈な「モノ」ガタリ」が正式な展示タイトルとなった。

(3) 展示開始までの準備と成果

各班の活動は、5月より資料班による資料調査から開始された。しかしながら、資料班でのスケジュール調整が難しく、数回の活動に留まった。夏休み明けの10月ようやく資料を選択する段階へと入り、同時に各班も始動した。連絡・会議は完全にSNS（FacebookとLine）で実施し、情報はウェブクラウドのファイル共有サービスを利用し、各班のフォルダを設け、画像や資料を共有した。毎回の授業で進捗を発表し、些細な案件はメッセージを送ることで連絡を密にし、作業時間に充てることができた。また、活動内容に応じて他班との連携作業も行った。

5月から開始された資料選定は難航を極めた。それは、展示の特性上、1つのジャンルに焦点を絞ることはなく、すべての展示品が調査対象となったからである。そのため、まず実習生全員に資料を割り振って簡単な調査を行い、資料の来歴が判明しそうなものを資料班に送り、それから資料班によって詳しく調べるといった手順で「資料群の来歴」が調べられた。

「資料群の来歴」とは、例えばキノコムラージュ標本は、イロガワリ、サンコタケなどの個別の種類は様々に収蔵されているが、すべて同じ来歴を辿っている。資料班によって来歴も含めた資料群の調査票が纏められ、その中から展示班が展示に効果的なものを選出した。展示班が展示品を選出することで、同時にガラスケースの大きさ、展示室の広さ、順路、キャプションの枚数や位置を考慮して進めた結果、迅速に展示資料を決定することができた。資料班の作成した調査票をもとにキャプション班が展示パネルの本文を執筆した。執筆した原稿文は、校正係、教員、資料館職員の順に校正を依頼し、完成原稿とした。最後に完成原稿と展示指示を使い、デザイン班、展示班、キャプション班の共同作業で展示パネル、解説パネル、キャプションの製作が行われ、3日間の搬入作業を経て企画展会期を迎えた。なお、各班の活動経過を表2にまとめておく。

会期が始まると、ミュージアム・ツアー・ワークショップなどの教育普及活動のリーダーが班員の中から3名の代表者が選ばれ、イベントの準備・開催を取りまとめた。会期中の来館者は、11月に274人、12月に432人、1月に311人、のべ76日で1017人となった。

(4) 評価

ここで企画展の準備を振り返って反省点として挙げるべきは、準備・計画を立てる以前の話し合いに時間を費やしてしまったということである。コンセプト決め、テーマ決め、企画展のテーマとタイトルを決定するのに3ヶ月以上かかった。特にタイトルは、一度決定した案を再考することを繰り返していたため、どのくらい話し合えるかも計画に組み入れて期限を決める必要があった。準

備作業に取り掛かるのが非常に遅かったため、結果的に準備期間が短くなってしまった。

また、情報共有が円滑に行われず、情報の重複が起る問題が生じた。会期が近づき準備が佳境に入る段階で展示自体のコンセプトや雰囲気の情報を行ったため、展示やデザインに統一性を持たせるのに時間がかかった。また、いくつかのクラウド・サービスを併用したため、データの保存場所が見つからないなどの混乱もみられたことは次の実習生に引き継ぐ反省点として挙げておきたい。

今後想定されうる解決策としては、夏休みまでに資料班が展示資料についての情報を、実習生全体で共有するための発表の時間を取ることが挙げられる。資料班の参照した参考文献なども実習生全体で共有し、資料に関する知識を全員でより密にするべきであった。情報共有で手間取った理由として、班構成が挙げられる。リーダー兼連絡係は、班員の中より選出されたが、リーダーが別作業で抜けることで班員が不足し、立てた計画が崩れることが目立った。特に、今回は資料班とキャプション班の間での情報共有や事実確認で時間をかけてしまった。また、教育普及活動は事前準備も多く、班の枠組みを越えて個人で行う作業量ではなかった。新たに班を設定することで、余裕をもって教育普及活動の作業が遂行できたのではないかと思う。

上記の問題が挙げられたが、後期からの作業の進行は円滑であり、本展示会は、概ね成功したといえる。評価として、展示品よりもエピソードの文章を読ませるといふ展示は難しい試みであったと思う。展示資料を擬人化し、展示資料の一人称での独白形式によるキャプションを設置する工夫や、マスコット・キャラクターを使用することでキャプションに書かれる物語に没入しやすくする工夫はしたもの、来館者に読んでもらわなくてはその効果も十全に発揮できない。映像や音声など、目や耳から入る情報を組み合わせることで、文章中心の展示の弱点を埋めることができるのではないだろうかと考える。

資料の来歴を問うといった学芸員の職務そのものを主題とする展示は、資料館の方針を把握して始めてできることであり、この摺り合わせは極めて難しいものであった。とはいえ、資料そのものの調査に加え「来歴」を題材として取り扱うのは、難しさも含めて非常に有意義な挑戦であった。今後の博物館実習も、題材の難しさに囚われることなく、学生企画展だからこそできる新たな挑戦をしていくことを期待する。

(松下)

表1 班別・役割分担と学生の内訳

班名 (人数)	役割分担等	所属学類 (専攻)・コース	学年
展示班 (4名)	班長	人文学類・フィールド文化学	4年
	校正	人文・日本史学	4年
	連絡係 (主)	人文学類・フィールド文化学	4年
	ワークショップ	人文学類・フィールド文化学	3年
キャプション班 (4名)	班長・ミュージアム・ツアー	人文学類・フィールド文化学	3年
		大学院人間社会環境研究科	博士前期2年
		人文学類・社会学	4年
	ミュージアム・ツアー	人文学類・フィールド文化学	3年
デザイン班 (4名)	班長	人文学類・フィールド文化学	4年
		人文学類・ドイツ文学	4年
		人文学類・日本史学	4年
	連絡係 (副)・プレスリリース	人文学類・フィールド文化学	4年

資料班 (5名)	班長・校正	人文学類・フィールド文化学	4年
	校正	人文学類・考古学	4年
	校正	人文学類・日本史学	4年
	校正	人文学類・日本史学	4年
	校正・ミュージアム・ツアー	人文学類・地理学	3年

表2 各班の活動日程

月	日	全体	展示	資料	キャプション	デザイン	教育普及*
4	12	ガイダンス、班編成					
	19	個人による企画プレゼン					
	26	バックヤード見学					
5	10	企画に関するグループ・ディベート					
	17	タイトル決定					
	24	企画書の完成					
	31	展示のコンセプトに関するディスカッション					
6	資料館での資料の取り扱いに関する実技実習 (4週)						
7	5	展示のコンセプトに関するディスカッション					
	12	展示のコンセプトに関するディスカッション					
	19	展示資料の選定					
	26	展示資料の選定					
10	4	展示・教育普及活動に関するディスカッション	資料・プラン決定、什器測定、配置・順路決定		キャプション、チラシ挨拶文作成	キャプション・ポスター・チラシ作成、ポスターデザイン打ち合わせ	
	10			資料採寸			
	11	資料館と資料班・校正係と打ち合わせ	プラン作成	資料決定			
	17	企画書・プレスリリース作成	資料館調査 キャプション 土台作成	調査票完成		キャプション・解説パネル作成	
	18		打ち合わせ				企画に関する打ち合わせ
	22					解説パネル第一稿提出	
	25		キャプション土台の再考			キャプション英語表記訂正、追加キャプション作成	
	27		四高撮影、彫像関連地図作成				
	28				校正の訂正		
	31					ポスター・チラシ完成	

11	1	プレスリリース	パネルの大きさ決定、パネルに合わせたキャプション文字数調整	展示パネル校正	キャプション入稿	ポスター・チラシ入稿	ミュージアム・ツアー準備	
	8	教育普及に関するディスカッション			最終校正	ポスター発送作業	ミュージアム・ツアーの内容、コンセプト決め	
	9				キャプション修正、完成	パネル修正・完成		
	12	搬入作業（～14日まで）						
	15	展示作業				パネル設置	モノログ回収BOX作成	
	16	企画展オープニング	パネルの配置調整			パネル修正BOX設置	魔鏡の投影実験、写真撮影 ミュージアム・ツアー原稿準備	
12	6	ワークショップ案の提案と検討						
	13					イベント告知用チラシ完成	ワークショップ調査、制作、試作実験一回目等	
	17	ミュージアム・ツアー（～21日までの昼休み）						
	20	博物館教育論におけるワークショップのリハーサル						
1	17	予行練習フィードバックを受けて再検討・再制作、図書館AV室でのリハーサル						
	23	ワークショップ（TV取材）						
	24	ワークショップ						
	31	企画展撤収、まとめと反省						

網掛部は授業時間外での活動である。

※教育普及は本来の役割分担に基づく班ではなく3年生を中心に運営された。

3. 資料について

第3章では、本企画展で展示した資料と、それにとまなう調査と選定作業について述べる。

(1) 展示資料の概観とコンセプト

今回の企画展のコンセプトは、資料そのものの価値によって構成された展示ではない。資料が資料館に収蔵される際の、もしくは収蔵された後の経緯に焦点を当てた、いわば来歴を展示する意味合いが強かった。その経緯をよく表すものとして利用したのが、その資料にまつわる来歴の「エピソード」である。この「エピソード」は、資料そのものが元々持っている価値、例えば歴史的価値、美術史的価値といったものに対して、その媒介として人が関わって形成されるものであるといえるだろう。そしてその「人」の部分は、多くの場合、博物館と言い換えることができる。この点に焦点を当てた今回の展示は、博物館の役割の内「収集」をクローズアップした展示と捉えることもできる。来館者、展示資料を通して少しでも資料館の、また資料館以外の博物館全般についても、その活動に興味と理解を得られるようにとの願いを込めつつ、資料館所蔵の資料の中から、数奇な来歴「エピソード」を持つ資料を展示した。資料館には金沢大学とその前身の歴史に関するものを中

心に資料が収蔵されているが、その中には石川県下の寺院校で保管され、本学教員（当時）によって引き取られて収蔵されたもの、第四高等学校や高等師範学校時代に備品として購入・使用された後、資料的価値を見出されて収蔵品となったものなど、その経緯は様々である。そして、それはそれだけ資料館学芸員の職務の範囲も多様であるということを示すものでもある。展示の導入部にはこの展示構想のきっかけとなったエピソードを持つ彫像を配し、末尾は資料館外で活用をされた動物剥製標本（以下、剥製標本）で締めくくることがとなった。展示した資料は28点である。

(2) 調査

今回の展示を構成する際や調査の際に基本単位としていたのが「資料群」というくりである。資料館では、収蔵の経緯や資料の特性が同じものを「資料群」としてカテゴリライズし、リスト化して管理する際に役立てていた。この「同じ資料群に含まれる資料は同じ経歴を共有している」という点に着目し、まずは資料群単位で調査を行っていくことになった。

5月に展示テーマが決定した時点で、いくつかの資料群については是非展示に組み込みたいということが決まっていた。これは展示テーマを考える際、もとのアイデアとして既に話し合いに登場していたことによる。しかし当時決定していた資料群のみでは実際の展示において十分な展示数になるか分からず、また当時有していた情報のみで展示資料すべてを決定してしまうには慎重さに欠けるということもあり、他の資料群も検討することとした。

資料館に収蔵されている膨大な量の資料を、資料班のみの限られたメンバーで調査することは不可能である。そこで、資料班以外の学生全体にも協力してもらい、まず展示に組み込むことができるような資料を洗い出すことにした。最初に、個々の資料単位ではなく、資料群というくりで、他班の学生に来歴の大まかな調査をした。その中でエピソードになり得る来歴を持つ資料群が見つかった場合には報告し、資料班がさらに詳細な調査を行っていくこととした。さらにこの作業と同時並行で、資料班は既に展示が決まっている資料群の調査も進めた。資料班が調査を行った結果は、調査票という形でまとめて、ひと目で把握できるように、またその後の作業に活かせるようにした。

資料班以外の学生に調査を依頼する際には、実習初期の段階で全体リーダーと資料班リーダーが資料館から受け取った所蔵資料の全リストを利用した。この全リストを、資料群ごとに分割し、必要のない情報（個人情報に関わるもの、収蔵庫内の配架場所など）を除いたものを作成した。これを一人あたり2、3群ずつ配布し、約1週間で簡易調査を実施した。このプロセスは1週間後にまた新しいものを配布し、調査を行う、という具合に繰り返された。これを計4回にわたって行い、8月末を持って全体の調査を終えた。この全体調査で新しくエピソードを持っている可能性のある資料群は4群ほどになったが、そもそもこの調査をした資料班以外のメンバーと企画した全体リーダー・資料班との間で、この調査の目的や役割を共有しきれていなかったということ、「エピソードがある」とされる確たる証拠が見つけないことなど、所々の障壁があり、この試みは成功したとは言いがたい。結果として展示班と資料班とで決定した最終的な展示資料群については最初想定していたものとはほぼ変わらないものとなってしまった。

資料群が確定したところで各資料群からいくつ資料を取り上げるかを検討した。この時に彫像を4体すべて展示することが決定し、展示全体のハイライトとなる。その他の資料群については大体の個数を決定し、最終的な展示資料についてはさらなる調査ののち、展示全体のバランスを考慮して決定することとなった。心配された展示資料数については、彫像という大きな見ごたえのある資料を展示することもあり、そこまで心配することはないのではないかとという見解に至った。

資料班としての資料調査は、まず第四高等学校物理機器や、キノコムラージュ標本など、過去に資料館での展示が行われていたり、資料の調査がなされていたりしたものはその報告をまとめた。さらに資料群のリストの中から、近年展示されているかどうか、状態が展示に耐えうるかどうかなどを考慮し、金沢大学資料館デジタルアーカイブなども参照しつつ展示候補を絞った。そのうえで収蔵庫に赴き、資料の大きさ、保存状態などを確認した。

収蔵庫における現物確認は夏季休業中も含め計4回行い、第3回目（7月26日）にキノコムラージュ標本と掛図の選定が終了、最終の第4回目（9月21日）に残りの資料群の選定が終了した。

しかしこの資料班としての調査は資料の来歴に重きを置いた「エピソード」ではなく、むしろそれ以外の「資料そのものの価値」に主に重点を置いていたため、この調査の際にエピソードに対する裏付けを入念に行っていなかった。彫像に関しては収蔵時のエピソードの根拠となる文献が当時未確認だったこともあり、収蔵庫での確認の際に資料館が保管していた記録をあたったが、他の資料群に関しては資料館の調査の中で言及されることはなかった。その結果、展示班とキャプション班が情報を整理する際、きちんと素材として目に見える形でまとめられたエピソードが見当たらないこととなってしまい、この2つの合同班で改めて資料館に聞き取りという形で調査訪問を行わなければならない状態となってしまった。特に剥製標本については、アーティストである浅井真理子氏により、写真を使った作品に利用された、という新しい情報がこの追加調査の際にもたらされ、それにより構成が変更されるという事態となった。

(3) 最終決定

最終的な展示資料の決定（表3）は、資料班ではなく展示班が行った。これは展示スペースや什器の問題の他に、展示全体のストーリーを構築するのを展示班に任せていたためである。どの資料群からいくつ資料を提出するか、という判断を、展示スペースとストーリーの関連を最も整理しやすい展示班に委ねることとした。資料班としては、決定した資料群のうち、資料群全体の来歴に深く関わる資料、それ自体に特徴的なエピソードを持つ資料などを事前に決定していたプランに基づいていくつかピックアップし、展示班に提示した。また第四高等学校物理実験機器については、資料館に収蔵された経緯から一つの資料群としてまとめられてはいるものの、実際は各個の資料が第四高等学校に購入・配布された経緯と時期は異なっているため、展示する資料についてはそれらなるべく重ならないように、資料班が候補を選定する段階で留意した。

(4) 評価

資料を用いて展示を構築する過程において、今年度の実習では、全体のストーリーを整理しつつ情報の取捨選択をするのが展示班、資料について情報を集めるのが資料班、展示班が必要と判断した情報を文章という形で出力するのがキャプション班、という役割が当初計画されていた。

しかし、実際この役割分担がうまく機能したかというそれは否というべきだろう。そもそも、班分けは今年度の展示テーマや内容について検討する以前に決定してしまっており、それは昨年度や一昨年度の博物館実習をもとに提案されたものである。昨年度や一昨年度のテーマはどちらかという「資料そのものもつ価値」に焦点を当てており、今年度のテーマとは大きく性格を異にするものであった。テーマの性格が異なれば展示に必要な要素についても変わってくる。その要素に応じた班編成を行うべきであろう。また班ごとの役割分担においても、全体の作業のなかでどの班が何についてどの範囲まで担うかということを明確にし、全員が理解して仕事にあたることが必須

である。今回はこの班編成と役割分担が食い違っておりかつ曖昧であったため、うまく連携がとれず、情報共有や作業の進捗に大きく支障をきたしてしまった。

また、収蔵庫確認を行っていたのが資料班員のみであり、展示作業が近づかなければ他班員は実物の資料を目の当たりにする機会がない、ということになったが、いくら画像でのイメージがあったとしても、そのみで実際の資料の取扱いをも織り交ぜた展示プランを作成することは非常に困難であると言わざるを得ない。さらに調査についても調査票が完成するまでは資料についての情報が他班の手に回ることがなかったため、資料がある程度選定されるまでは資料班以外は展示について非常に不透明なイメージのまま他の作業を進めていくこととなってしまった。また班ごとで個別に収蔵庫に赴くというスタイルも、資料館としても学生側としても煩雑になってしまうため、資料に関する作業は合同班というような形で行う方が望ましいと思われる。

(櫻井)

表3 展示資料リスト

	資料群名	資料名
1	彫刻 (彫像)	木造地藏菩薩立像
2		木造如来形坐像
3		木造天部形立像
4		木造天部形立像
5	第四高等学校キノコムラージュ標本	シロシメジ
6		キツネノチャブクロ (ホコリタケ)
7		ナラタケモドキ
8		コベニタケ
9		サンコタケ
10		イロガワリ
11		ベニソウメン
12		オウギタケ (アフギダケ)
13	第四高等学校物理実験機器	マグデブルグ半球
14		ブンゼン氏分光計
15		日本魔境
16		モールス氏電信機 (模型)
17		フェヒナー氏電気計
18		L-3B型抵抗測定器
19	教養部物理教室資料 (四高)	昭和廿十年五月 物理機械収蔵所覚
20	理工学域実験機器及び掛図	分銅
21		複写用暗箱
22		家庭太陽灯
23	歴史学掛図	加賀金府城之図

24	共通教育旧蔵動物剥製標本	剥製標本「ライテフ（ライチョウ）秋毛」
25		剥製標本「カモノハシ」
26		剥製標本「エジプトネズミ」
27		剥製標本「ネズミ」
28		剥製標本「クマネズミ」

4. 展示室の構成と設営について

本章では、展示室の構成とその意図、展示室の設営作業についてまとめる。本展示は、彫像、キノコムラージュ、四高物理実験機器、理工物理実験機器、剥製、掛図の6つの資料群ごとにセクションを設けた。また、最後に、来館者参加型展示のセクションとして、来館者の身の周りの「モノ」の来歴エピソードを展示するブースを設けた。以下では、具体的な展示室の構成や、展示室の設営作業に関して詳述し、成果や問題点などを提示しつつ、事後評価を行う。

(1) 展示室の構成内容

本展示は、展示品の来歴エピソードに焦点を当てたオムニバス形式の展示であり、彫像、キノコムラージュ、四高物理実験機器、理工物理実験機器、剥製、掛図の6つの資料群により構成された。個々の資料1点1点に着目した見せ方ではなく、資料群としてまとまった見せ方をすることや、各資料群を並列的に示すことを意識したが、全体の流れとしては動線が時計回りとなるよう展示資料やパネルの配置の仕方を考慮した（図1）。

展示に関わるデザインについては、初めにポスターデザインから設定し、後に全体のデザインを決定した。資料の来歴に焦点を当てる、資料の価値を見出す、という観点から、資料にスポットライトが当たる様子をイメージしたポスターデザインを採用した（図2）。それに従い、展示室内のパネルの配色やデザインも設定し、全体を通して統一感を保つことを意識した。

解説パネルについては、最初に短いキャッチコピーで来館者の関心を引き、次いで展示資料が独白する形で詳細な来歴エピソードを提示し、その後に補足説明を加えるという形式を採用した。展示資料による独白では、それぞれの展示資料を擬人化し、口調を変えてキャプションを作成するという工夫を凝らした（図3）。これにより、それぞれの資料群の来歴エピソードの多様性やユニークさを強調し、来館者に楽しく見てもらえるような効果を狙った。また、全体のナビゲーターとして、本展示の目玉でもある「木造地藏菩薩立像」をキャラクター化し、「菩薩ポイント」と称して展示のポイントとなる部分を示す際に活用した（図4）。

展示資料の配置に関しては、展示資料の中でも特にユニークな来歴エピソードを持つ彫像全4体のうち3体を入り口正面に配置し、インパクトを与えつつ来館者の関心を引きこむ効果を狙った。大きいものでは像高が148cm、小さいものでも89cmの高さがある彫像は、近くで見ると迫力があり、一方で資料館の外から見てもその存在感を感じることができた。そのため、資料館に足を運ぶ機会が少ない人や通りかかった人の興味をも引きつけ、来館者数増加へ繋げるという効果も狙った。彫像以降の展示資料の配置は、主に展示資料のサイズを基準に、展示室のスペースを効率よく使用し、来館者の動線もスムーズとなるように決定した。また、パネルの配置では、動線の中で不自然な位置にならないようにすること、来歴・補足説明という流れが崩れないようにすることの2

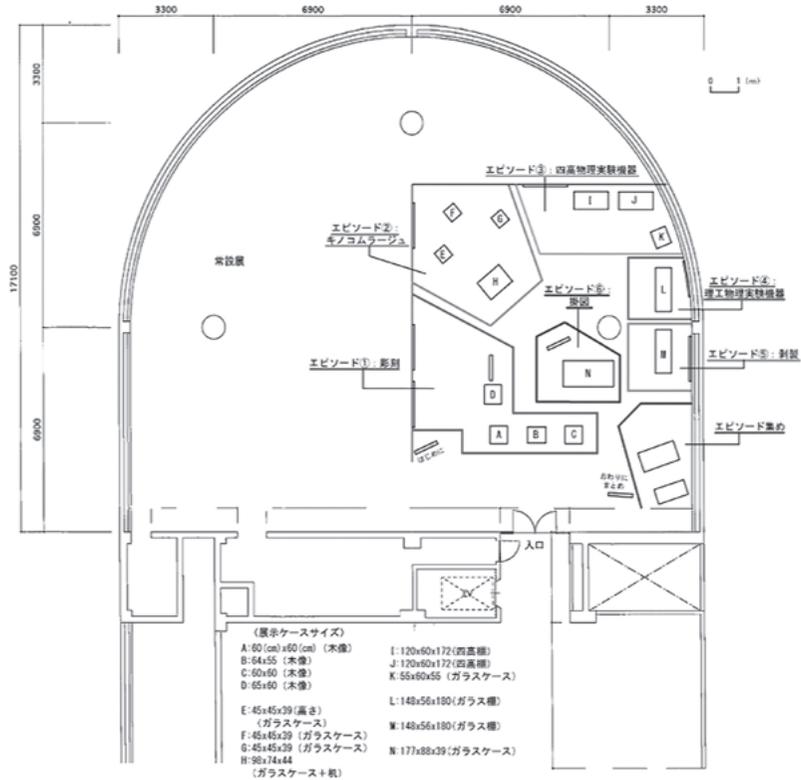


図1 展示室の構成

点を意識した。

展示の最後に、来館者に自身の所持品を題材に来歴エピソードを記入の上、ポストに投函してもらい、それを掲示するという来館者参加型展示のセクションを設けた (図6)。ここでは、来館者に「モノ」の来歴に関して、自分の身の周りの「モノ」に適用して考え、独白という形でアウトプットしてもらうことで、単に展示を楽しんでもらうだけではなく、「モノ」の経緯と価値の再発見について考えるという展示コンセプトを伝える一助となる効果を期待した。

(2) 展示室の設営

展示室の主な設営作業は、11月12日から14日の3日間にかけて、授業の合間の空き時間や昼休みを利用して行われた。また、パネル作成も展示室設営と同時に行われ、完成したものから順に展示室へ設置した。一部、設営期間中に修正が必要となったパネルや、来館者が投稿する独白エピソードの回収専用ポストは、直前まで作業を要したため、設営作業期間後に設置した。

本企画展の展示資料は基本的に収蔵庫に収蔵されているものであったが、彫像に関しては、日頃から常設展に展示されている資料であったため、常設展からの移動を行う必要があった。重量のある彫像は完全に持ち上げて運ぶことはできず、資料館職員の監督のもと、常設展の位置から本企画展の配置位置まで、プラスチックの板上を展示ケースごと少しずつ人力でずらしながら移動させた。

展示班が作成した図面をもとに配置していき、資料同士のバランス、展示ケース内のキャプショ



図2 ポスター

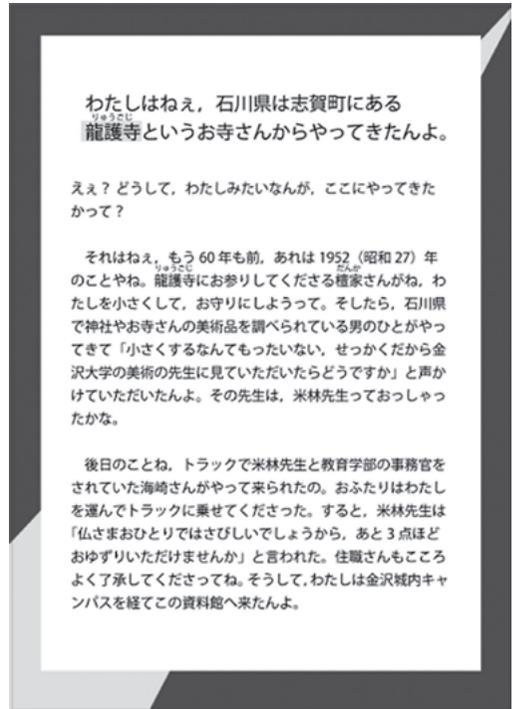


図3 来歴パネル

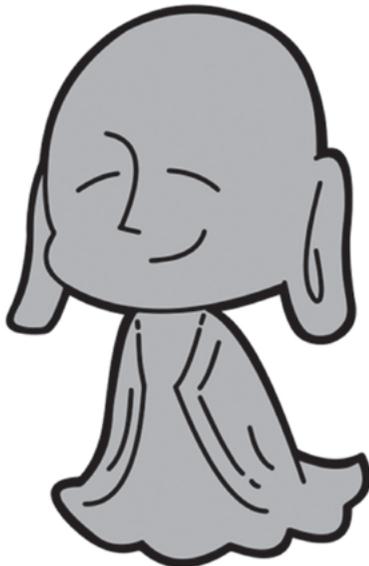


図4 菩薩キャラクター

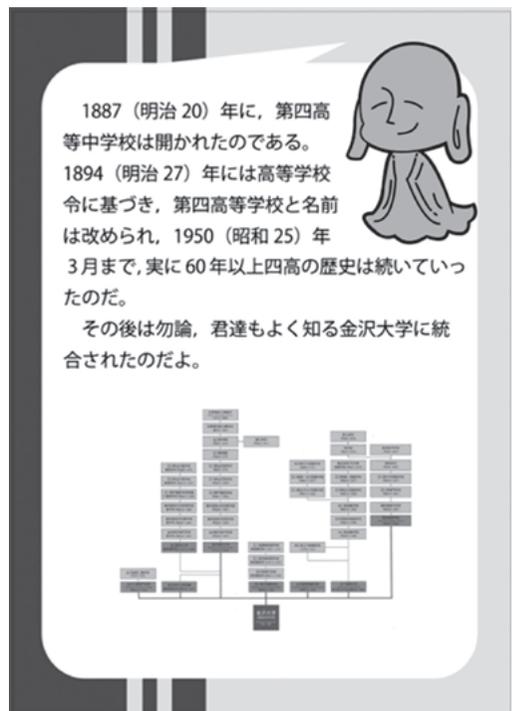


図5 菩薩ポイント

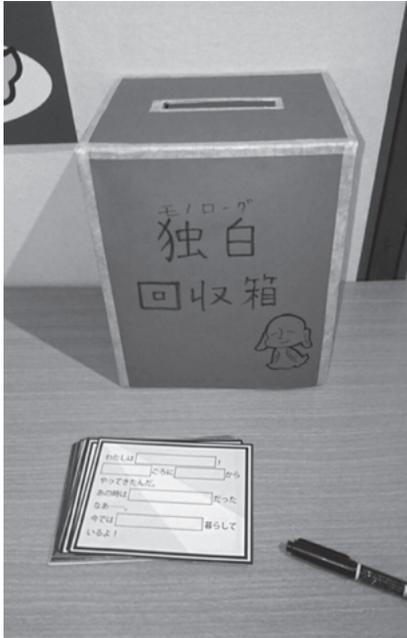


図6 来館者による独白エピソードの回収ポスト

ンの位置、照明、パネルの位置など、企画展開始直前まで何度も確認しながら調整を重ねた。実際に設営作業をしてみないと分からなかったことも多く、特に、展示全体を通して見やすい構成になっているかという点に関しては、展示資料の前に立ってその場のバランスを眺めるだけでは正確に確認することは困難であった。そのため、一通り設営が完了した後、実際に学生全員で展示室を一周し、パネルの位置が来館者のスムーズな移動を妨げていないか、などが動くからこそ発生しうる問題はないか確認をした。例えば、今回の場合、掛図の独白パネルの位置が人の動きに対して少し遠く、最初に見て欲しいのにも関わらず見にくいのではないかという指摘が挙がったため、独白パネルの位置をより手前に変更するというような修正を行った。

(3) 評価

本企画展はオムニバス形式の展示であったが、デザインやキャプション、コンセプトの統一性を意識したことで、1つ1つのセクションが孤立することなく、展示室全体として統一感のある雰囲気にとめることができた。また、

展示資料の配置では、彫像を入り口に配置したことによって、来館者の関心を引きつける効果を狙ったが、実際に本企画展を機に初めて資料館を訪れたという来館者の声もあり、狙いに対して一定の成果を発揮したと言えるだろう。

展示解説では、資料群を擬人化し、それぞれの来歴エピソードを、口調を変えて表現することにより、来館者に親しみを持って読んでもらうことに成功した。エピソードを中心に紹介する以上、来館者に文字情報を多く読んでもらう必要が生じていたが、この工夫により来館者を飽きさせることがなく、気軽に見てもらうことができた。また、他のパネルとの差異化も図ることができ、展示全体にメリハリをつけることもできたのではないかと考える。さらに、要所に登場させた菩薩のキャラクターも来館者に親しみやすい印象を与えるという点で効果的な働きをしたと言えるだろう。

本企画展は、博物館の役割のうち「収集」に着目し、資料の来歴紹介に重点を置いた展示であった。なぜ資料が資料館に収蔵されるに至ったのかということの面白さを伝えると同時に、展示を通して、資料の価値の再発見や、資料館に収蔵されることで「モノ」が新たに「資料」として生まれ変わるプロセスを来館者に伝え、そこにはどのような意味があるのかということを問いかけることをも目的としていた。最後の来館者参加型展示のセクションは、単にアクティビティとしてだけではなく、前述の意図も踏まえて設置したセクションである。来歴エピソードを効果的に伝えるという点や、来館者に気軽楽しんで見てもらうという点に関しては大きく成功した一方で、その印象に引張られてしまい、肝心な目的の達成が十分に果たせなかった可能性がある。親しみやすい雰囲気のパネルに対し、展示の最後の部分でどのようにして本来の目的の部分を効果的に表現するかということは事前に議論に挙がった点ではあったが、難易度の高い課題であった。展示全体の雰囲気も重要ではあるが、最後の「終わりに」の部分は、最初の「はじめに」の部分と同様に、企画者

の意図を伝えるうえで重要な部分であるため、的確に我々の意図を来館者に伝えることのできる方法をより深く追求することで、より効果的な見せ方が可能になり、来館者の学びの効果を高めることにも繋がるだろう。

設営作業に関しては、作業を行うなかで発生した問題点に対して、その場にいる学生同士で話し合いや確認をしながら臨機応変に対処をすることができた。しかし、事前に必要な作業の確認やそれに対する準備、各日で確保可能な人数の確認など、事前準備が不十分な点が多々あった。また、設営メンバーの入れ替わりもあるなかで、全体での設営状況に関する情報共有が円滑ではなかった場面もあった。よりスムーズな設営作業を行うためにも、設営作業前に学生同士による打ち合わせや資料館職員への確認を入念に行うことが望ましい。準備に余裕を持つことにより、焦ることなく設営作業や確認作業を行えるほか、急な変更に対処する余裕も生まれるだろう。

(藤本)

5. 教育普及活動等の実施について

本章では教育普及活動の企画について述べる。2018年度実習では、資料の収集にスポットを当て、資料の来歴について紹介する企画展を開催したが、来場者に鑑賞してもらうだけでなく、モノが資料へと価値づけされる過程やその意味について、より多くの人に知ってもらうためにミュージアム・ツアーや体験型のワークショップを企画した。さらにテレビやラジオなどの取材も受け入れた。

(1) ミュージアム・ツアー

ミュージアム・ツアー（以下「ツアー」とする）の実施期間は、12月17日から21日の平日5日間である。昼休みの12時15分から12時45分に展示解説をした。学生全員で日程を決めたうえで、担当曜日と解説を加える資料群を振り分けた。ツアーでは物理実験機器、剥製、彫像、教育掛図、キノコムラージュの5つの資料から、日替わりで2つずつ解説し、二日連続して同じ資料群が並ばないように配慮した。11月上旬にツアーの内容やコンセプトを定め、それぞれ資料の解説の原稿を作成した。12月の中旬には、担当曜日を決めたうえで、話し合いやシミュレーション、リハーサルを経て、ツアーを実施した。

ツアーでは、資料そのものの解説だけでなく、学生の学びや心情の変化といった内側で関わっている学生でしか感じ取ることができない情報を伝えることも意識した。また、補足資料を写真で提示することで、解説に深みを持たせた（図7）。さらに、参加者からの質問とその回答は、学生全員で情報共有を行うことで、後の解説に役立てた。

企画展では、資料のキャプションでその来歴を明記しているため、先述のように内側で関わっている学生のオリジナリティを付加させることで、ツアーを実施する価値を見出した。ツアーに参加した教員から、目の前にある展示資料から来歴や歴史に遡っていくと、聴衆を話に引き込むことができるとのコメントをいただいた。資料の来歴を解説するにしても、メインとなるのは資料そのものであり、資料から引き出していくような工夫が必要である。

(2) ワークショップ

ワークショップの実施回数は、1月23日（水）14時50分から16時と1月24日（木）14時50分



図7 ツアーでの写真を用いた解説



図8 ワークショップのスライド風景



図9 ワークショップ予行演習の風景



図10 ワークショップでの魔鏡の投影

から16時の計2回で、中央図書館内AV室にて実施した。これまでの学生企画展で、ワークショップが実施されたのは一昨年の「ハカリモノー文系学生が紹介する科学実験機器ー」での、し景儀の製作ワークショップ、昨年の「バンカラ寮生類～金大寮史124年～」での「怪談会」がある。今回の企画展では、資料の収集と来歴にスポットを当て、モノが資料へと価値づけされることの意味を紹介し、さらには資料館の役割や意義について問い直すものである。しかしながら、資料の価値については、展示やキャプションの説明だけでは伝わりにくい資料も存在するため工夫が必要であった。特に、展示資料のなかでも、魔鏡は実際に光を当てなければ原理を知ることができず、資料としての価値を理解しにくい。そのため、魔鏡の仕組みを知ることにより、その重要性に気付かせるような仕組みが必要であると考え、今回は魔鏡を実際に製作するという体験型のワークショップを企画した。展示品のひとつである魔鏡を作成し、物理的原理や歴史、使い方を学ぶための参加型の教育普及活動である。材料や道具などは準備し、参加費は無料とした。日本魔鏡という歴史的資料の側面だけでなく、魔鏡の物理的原理といった科学的知見も含めることで、文系理系問わず多様な学生の参加をうながすとともに、学外に向けてもアナウンスを行い、先着順の開かれたワークショップを目指した。会場の規模に合わせて、1回の参加人数は18人程度とした。後述するが、本企画展のワークショップは注目を集め、NHK金沢放送局がニュースのトピックとして放送したことにも言及しておく必要がある。

ワークショップは前半の企画説明と後半の魔鏡の製作に分けられる。前半では、展示資料の地蔵

菩薩像や魔鏡が企画展の内容や資料の来歴、魔鏡について参加者に語り掛けるようなアニメーションによる説明を行った(図8)。後半では、魔鏡の製作にとりかかり、担当学生が手順ごとに説明を行う。魔鏡が完成したのち、その物理的原理を紹介することで、参加者の疑問とその発見を促すようにした。博物館教育論の時間を借りて予行演習を行い(図9)、学生からのフィードバックを受けて、改良を進めていった。

第1回目のワークショップでの参加者は、人文学類の学生を中心に合計10名であった。作成した魔鏡に光を当てる際に、参加者によって映り方に差があったため、もう一度作業タイムを設け、2回光を当てて映す時間を取った。第1回目では、説明とプリント配布を同時に行ったり、作業のポイントを十分説明しきれなかったりと反省点が多く上げられた。学生全体で反省点を共有することで、第2回目のワークショップに向けてポイントを押さえ、改良を進めた。

第2回目のワークショップでの参加者は合計12名で、第1回目と比べて理系分野の学生や留学生といった多様な学生の参加が見られた。作業中にBGMを流したり、スタッフが積極的に参加者と関わり、表情や歓声など楽しい雰囲気を表したりしたことで、より緊張感がほぐれた朗らかなものとなった。また、魔鏡を投影する際には、参加者を1箇所に集めることで、お互いの顔を見合わせることもでき、場の空気の緩和にもつながった(図10)。第1回目の反省点を上手く反映させ、よりよいワークショップの運営につなげることが可能となった。

(3) 取材

2018年度の実習では、12月14日に資料館からプレスリリースを行い、主に取材の依頼を受けたものに関して対応した。取材対応は以下の通りである。1月13日に『金沢大学Radio Campus』、1月23日にNHK金沢放送局の『かがのとイブニング』(1月23日放送)で紹介された。『金沢大学Radio Campus』では、パーソナリティーでもある学生が企画展の紹介を行った。『かがのとイブニング』では、企画展やワークショップの内容について紹介がなされ、第1回目のワークショップの風景を放映するとともに、第2回目のワークショップの告知も重ねて行われた。

(4) 評価

今回の企画では、ツアーに加えて、体験型ワークショップを開催することで、企画展の内容や資料だけでなく、資料館の役割や意義についてより多くの参加者に知ってもらうことができた。特に、ワークショップの企画立案の段階で、学生全員が教育普及活動の目的・理念について再確認し、今回の企画展のテーマに合わせたワークショップの目的・内容の設定を行った点は、非常に重要であった。

2018年度の博物館実習では、グループ分けを企画展の開催に向けて設定したため、教育普及活動については担当グループを設定しておらず、学生全体で企画・運営を行った。ツアーやワークショップは主に12月や1月を中心に行われるため、学生同士の情報共有やスケジュール管理が大切である。また、準備期間から学生や教員、資料館職員それぞれの視点を通したフィードバックを行うことも重要で、ワークショップではリハーサルだけでなく、本番においても実践し、第2回目のワークショップをよりよいものにすることができた。ツアーの準備では、最初に資料の来歴を中心とした説明の原稿を作成したが、笠原氏から参加者と対話することがツアーを開催することの目的であるとのコメントを受けた。展示室で資料や説明をただ見るのとは違う、ツアーの意義を改めて認識し、自分の言葉で説明することを意識して取り組むことにつながった。

教育普及活動は、企画展の内容や資料について知ってもらうだけでなく、資料館に来たことがない人に対して資料館を知るきっかけとなり得るものでもある。特にワークショップは幅広く参加者を集めることができる点で有効である。しかし、ワークショップの開催だけが目的ではなく、ワークショップをとおして資料館の役割を参加者に知ってもらうことも重要である。今回のワークショップでは、資料館の収集という役割にスポットを当て、その意義について魔鏡の製作や体験をとおして伝えることができた。参加者のアンケートからも資料館の役割を知ることができたとのコメントがあり、ワークショップが有効に機能したのではないかと考える。

今回はツアーとワークショップともに広報活動が不十分であり、多様な学生を集めるためにさらなる工夫が必要であった。ワークショップ当日のピラ配りやアナウンスだけでなく、大学全体での共有、さらには地域に向けた広報活動も意識しなければならない。

(岡田)

6. 学生展への大学資料館の関わり

資料館では学生企画展を2014年度から毎年開催しており、本稿で報告している学生企画展は5回目にあたる。2019年度に資料館が開館30周年を迎えることもあり、本学生企画展のテーマは所蔵資料の来歴の紹介をとおして、資料館の役割を来館者に伝えたいという目的があった。ここでは、本学生展の成果と準備段階での問題点をあげ、今後の学生展に引き継ぐべき課題を提案する。また、最後に本学生企画展に限っておこなわれた活動について補足する。

これまでの学生展のテーマと異なり、今回は博物館の実務、とりわけバックヤードにおける資料調査を意識したテーマ設定となった。資料館でも展覧会の際に寄贈資料等の来歴を解説キャプションに記載することはあるが、来歴自体を物語として紹介することはなかったため、画期的な手法である。来歴調査・研究は文化財等を保有する施設では必要不可欠であるが、多くの場合、報告書等で公表される程度の内容であるため、展覧会のメインテーマとすることは稀である。しかし、資料を擬人化し、来歴を独自させるという手法をとることにより、来館者と展示資料の距離が縮まり、よりなじみやすい解説方法となったと感じた。また、各資料群のコーナーのはじまりに一文の「独白パネル」を作成し、イントロダクションとした点も来館者の動線を意識した非常に効果的な手法であった。教育・普及活動では、第四高等学校物理実験機器の魔鏡についてのワークショップを開催し、参加者が同資料の簡易版を作成することで科学的な原理を理解することができた。物理実験機器の展示はこれまでも何度か行ったが、魔鏡に関しては原理を含めて紹介する機会は少なかったもので、有意義なイベントとなった。

一方、これまでの報告にあるように、準備段階ではいくつかの問題点も存在した。そのうち、資料館でも検討がなされた、学内における備品の廃棄と資料の収蔵の問題である。資料館は大学にとって学術的・歴史的に価値があると判断されるものを資料館委員会の承認を経て収蔵している。学内移管の場合、多くは備品等を廃棄する必要が生じた段階で、所管する部局の判断で資料館への移管申請がなされる。廃棄される段階では備品であるため、資料ではないが、資料館に収蔵した時点で歴史的な資料となる。学生はこの資料となったものを見て今回のテーマに「備品・消耗品」が「救出」され「学術資料」になったと考えたわけである。とはいえ、それは資料館からの観点であり、どの部局も文化財保護の観点を意図的に無視して廃棄したわけではない。廃棄する側からみれば、備品の更新という日常業務を行ったに過ぎない。物理実験機器が最たるもので、明治期には

第四高等学校の学生が熱心に実験に使用していた高価な舶来品でも、昭和期に入ればより安価で性能のよい機器が国内で製造され、次々と更新される。幸いにもこれら物理実験機器は四高から金沢大学になった1949年以降も理学部で保管され、資料館設立後に移管されたので現在の我々も目にすることができる。歴史資料となり得たかもしれない物品の廃棄は、現在、博物館に関する科目を学ぶ学生だけでなく、博物館関係者にも無慈悲な行為のように映り、感傷的になりがちである。そうした感覚に学生が寄り添い、今回のテーマの方向が動いていく過程が見て取れたが、本来どういったかたちで資料が廃棄され、そうでない場合は移管されるのかについて正確な知識を持ってほしかったので、ことさら「救出」という表現に注目しないように促した。誰か特定の悪者をつくるのではなく、「捨てた誰か」より「残そうとした誰か」に注目してほしいからである。それが本来の学芸員＝Keeper（イギリスでは博物館の館長を意味する場合もある。）を理解する作法ではなかろうか。このことに学生も理解を示し、結果、解説パネルにはより事実即した来歴が記された。もう一点、教育・普及活動について、資料館から意見を述べる立場でないことは承知しながらも、ワークショップについては特定の学生に負担がかかってしまう傾向があったので、今後はある程度の制限を設ける必要があると考える。

補足として、今までにない実習活動ができたという点で、剥製標本の学外利用についての解説パネルの作成について紹介する。ここでいう剥製標本とは、共通教育旧蔵の動物剥製標本であり、第四高等学校時代のものを含む全29点のコレクションである。これは学習教材としての役割を終えたため、共通教育機構から資料館へ2014年に移管されたものであった。学生企画展ではここから5点を出展した（cf. 表3展示資料リスト）。同剥製標本はこれまでも資料館の企画展で展示歴があったが、剥製標本を題材に作品を製作するアーティスト、浅井真理子氏が、2016年に自身の作品に同剥製標本の写真を使用した事実を受け、資料館から受講生に資料とともに学外利用の例として紹介してはどうかと提案した。これに伴い、解説パネルに同氏の作品の一部である写真を使用する必要が生じ、使用許可を得るために、資料館職員と実習生のリーダー（松下）の間で依頼文を作成し、掲載の許可を得た。また、展示パネルの解説文作成にあたっては、浅井氏の作品コンセプトを考慮し、極力、主観的な解説を行わないように心掛け、事実関係のみを記すように配慮した。一連の作業は、著作物を自館の展示に使用する際に行う手続き業務の実習ができただけでなく、芸術作品を制作する作家との直接のやり取りを体験することができ、資料館側も予想していなかった現実味のある実習となった。また、移管前だけでなく、所蔵資料となった後の物録（モノローグ）も加わったことで、現在進行形で利用されている資料の姿を紹介することができたともいえる。

註

- 1 笠原健司「金沢大学資料館における博物館実習の取り組み」『金沢大学資料館紀要 No.11』2016年3月、金沢大学資料館、55-56頁。
- 2 同論文57頁。
- 3 笠原健司、笠原朋与、野村将之、虫明慧子、渡辺司、有村誠「学生による企画展の振り返り：金沢大学における博物館実習の事例」『金沢大学資料館紀要 No.12』2017年3月、金沢大学資料館、1-20頁。